

**居場所（安心できる人）の評定と自己－他者認識：
協同作業認識との関連**
**Ratings of *Ibasho* (The person who eases one's mind)
and Awareness of Self and Others:
Relationship of Belief in Cooperation**

岡村 季光
Toshimitsu OKAMURA

要旨：居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごす感情・評価、友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群、全体高群、全体低群の3群に分け、安心できる人の評定による群ごとに、ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度、友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出し検討を行った。その結果、1) 安心できる人の評定が全体的に低い者は、協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は、協同作業の必要性を低く感じている傾向にあった。2) 相関係数の同等性の検定において、友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互惠懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果、“協同効用因子”において全体高群と比して全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く、“互惠懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

キーワード：居場所、安心できる人、自己－他者認識、協同作業認識

1. 問題と目的

人は乳幼児期から青年期に至るまでの間に、生活する場が家庭以外に学校をはじめ様々な領域へと重層的に拡大していく。そして生活する場が安心できると感じるか否かは、精神的健康の観点から重要であると言えよう。岡村（2015）は、“精神的安定”という主観的感情を重視し、“安心していられる場所”を居場所と定義づけ、とりわけ“安心できる人”が居場所における重要な要因であるとした。

一方、青年期においては、他者と過ごす居場所と同等に、「自分ひとりの居場所」を志向することが増え、その固有の心理的機能も確認されている（杉本・庄司，2006）。また、増淵（海野）（2013）は、大学生にとってのひとりの時間は「自己内省」の意味を持ち、個人的活動に没頭することで充実・満足感を得られ、自我同一性形成に役立つと指摘している。居場所（安心できる人）の評定において“自分”を志向する者は、他者との心理的距離をとり（豊田・岡村，2002）、他者と親密な関係を回避しようとする傾向（岡村・豊田，2015，2016）が明らかになっている。また、ひとりで居ることに積極的・肯定的な意味を見だし（岡村，2014）、ひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが影響を与えていることが明らかになった（岡村，2018）。

さて、近年、「アクティブ・ラーニング」が文部科学省の施策用語として登場した（中央教育審議会，2012）ことで、大学における教授・学習法は、教員による一方的な講義形式の教育のみならず、学修¹者の能動的な学修への参加を取り入れたものを求められるようになった。具体的には、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の協同学習が挙げられる。関田・安永（2005）は、他者と協同して何らかの課題を達成しようとする協同作業場面において、参加者は自分の利益のみならずグループ全体の利益を求めて活動することが期待されている。学習成果は、メンバー間の相互交流の質をできるだけ高め、メンバー1人ひとりがグループの学習活動に積極的に貢献するという協同作業場面を創り出すことが前提となる（関田・安永，2005）。上述の学修の中で、「自分ひとりの居場所」を志向する学生が、アクティブラーニングにおける協同学習をどのように捉えているのかを検討することは興味深い。

そこで本研究では、居場所（安心できる人）の評定と自己認識及び他者認識、協同作業認識の関連を検討することを目的とする。具体的には、自己認識において、ひとりで過ごすことに関する感情・評価を検討する。また、他者認識においては、協同作業が大学等の授業において友人と行うことが多いと想定されることから、友人への認知を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査対象者

近畿圏内に在住の大学生・専門学校生168名（男子53名・女子115名）が対象であった。平均年齢は19.85歳（*SD* 1.65、範囲18～30歳）であった。

2.2 調査内容

2.2.1 「居場所」（安心できる人）ごとの安心できる程度の評定 “あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは、ホッとする、落ち着く等という意味です。”という教示を行い、“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”“恋人”という場面を設定した。そして、各場面において安心できる程度を調べるために“5：とても安心できる”から“1：あまり安心できない”の5件法尺度を設定した。

2.2.2 ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度（ひとり感情・評価尺度）ひとりで過ごすことに関して、どのような感情や評価を行っているかを測定する尺度であった。増淵（海野）（2014）によって開発された。“孤独・不安”11項目（例「ひとりの時間」はさみしい）、“自立・理想”8項目（例 友達と一緒になくても行動できるようになりたい）、“充実・満足”4項目（例「ひとりの時間」を有効に使っていると思う）、“孤絶願望”3項目（例 できることなら、だれもいないところに住みたい）の計26項目からなっていた。各項目について“6：とてもそう思う”から“1：まったく思わない”の6件法尺度を設定した。

2.2.3 現代青年に特有な友人関係の取り方に関する尺度項目（友人関係尺度）岡田（1999）によって開発された。“自己閉鎖”13項目（例 本当の気持ちは話さない）、“傷つけられることの回避”8項目（例 友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける）、“傷つけることの回避”7項目（例 友だちを傷つけないようにする）、“快活的関係”3項目（例 冗談を言って相手を笑わせる）の計31項目からなっていた。なお、下位尺度名

¹ 中央教育審議会（2012）の答申以降、単位制（大学設置基準第21条）に基づく大学の正課の授業に関する学習は、原則として「学修」であるとして表記統一がはかられている（溝上，2016）。

は岡田（2007）に倣い、岡田（1999）において重複して因子が負荷されていた項目を削除して用いた。

2. 2. 4 協同作業認識尺度 協同作業の認識を測定するため、長濱・安永・関田・甲原（2009）によって開発された。“協同効用因子” 9項目（例 たくさんの仕事でも、みんなと一緒にやれば出来る気がする）、“個人志向因子” 6項目（例 周りに気遣いしながらやるより一人でやる方がやり甲斐がある）、“互恵懸念因子” 3項目（例 協同は仕事のできない人たちのためにある）の計18項目であった。長濱ら（2009）は、学生が一般的に、協同作業は効果的であるという肯定的な認識（協同効用）が基盤としてあり、そのうえに一人で作業することを好む傾向（個人志向）や、協同作業により参加者全員が平等に利益をえることは難しいという認識（互恵懸念）が加味された重層的な認知構造をもっていると解釈している。この認知構造には性差は認められず、少なくとも18歳に至るまでに形成されるとされている（長濱ら，2009）。

2. 3 調査手続

著者が担当する授業終了後に上述の調査用紙を配布し、以下に示す調査を集団的に実施した。

2. 3. 1. 「居場所」（安心できる人）ごとの安心できる程度の評定 2. 2. 1に記述した調査項目について、“自分ひとり” “父親” “母親” “きょうだい” “現学校以前の友人” “現学校以降の友人” “恋人” という場面において、それぞれ“5：非常に安心できる”から“1：あまり安心できない”の5件法で回答を求めた。

2. 3. 2. ひとり感情・評価尺度の評定 2. 2. 2に記述した調査項目について、“6：とてもそう思う”から“1：まったく思わない”の6件法で回答を求めた。

2. 3. 3 友人関係尺度 2. 2. 3に記述した調査項目について、“6：とてもあてはまる”から“1：全くあてはまらない”の6件法で回答を求めた。

2. 3. 4 協同作業認識尺度 2. 2. 4に記述した調査項目について、“5：とてもそう思う”から“1：全くそう思わない”の5件法で回答を求めた。

2. 3. 5. 倫理的配慮 調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを説明した。

3. 結果と考察

3. 1 安心できる人評定による分類

回答に不備があったものを除き、各場面における「安心できる人」評定得点を用いて、クラスター分析を行った。結果を図1に示す。安心できる人の評定が全体的に低かった群を“全体低群”（48名）、高かった群を“全体高群”（52名）、他の場面と比較して自分ひとりの場面のみ評定が高かった群を“自分群”（41名）と命名し分類を行った。

3. 2 各尺度得点の相関（ r ）

ひとり感情・評価尺度、友人関係尺度及び協同作業認識尺度得点の相関（ r ）を検討した。その結果を表1に示す。その結果、“孤絶願望”及び“自己閉鎖”は“協同効用因子”と弱い負の相関、“個人志向因子”及び“互恵懸念因子”とそれぞれ中程度の正の相関がみられた。“傷つけることの回避”は“協同効用因子”と弱い正の相関、“互恵懸念因子”と弱い負の相関がみられた。“快活の関係”は“協同効用因子”と弱い正の相関がみられた。

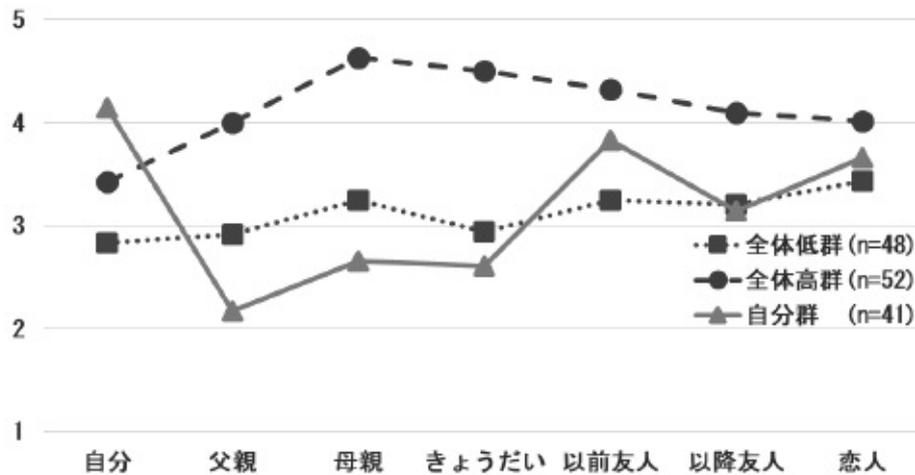


図1 安心できる人評定の分類

表1 ひとり感情・評価尺度、友人関係尺度及び協同作業認識尺度得点の関係 (r)

	協同作業認識		
	協同効用	個人志向	互惠懸念
ひとり感情・評価			
孤独・不安	.03	-.10	.09
自立願望	.20**	.05	-.00
充実・満足	.10	.13	-.04
孤絶願望	-.35**	.45**	.41**
友人関係			
自己閉鎖	-.24**	.24**	.25**
傷つけられることの回避	.16*	.05	-.06
傷つけることの回避	.36**	-.19*	-.32**
快活的関係	.32**	-.03	-.19*

* $p < .05$, ** $p < .01$

安心できる人の評定による群ごとに、友人関係尺度と協同作業認識尺度の関係調べるため、各尺度得点の相関係数 (r) を算出した。その結果を表2に示す。協同作業認識尺度との相関係数の同等性の検定を行なった結果、ひとり感情・評価尺度においてはいずれも群間に有意な差を見いだせなかったが、安心できる人の評定が全体的に低い者は“協同効用因子”と中程度の負の相関がみられ、“個人志向因子”及び“互惠懸念因子”とそれぞれ中程度の正の相関がみられた。すなわち、他者との協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。増淵(海野)(2014)は、孤絶願望の高さは青年期における発達途上の一時期である一方、他者や社会と自分とのつながりや距離感をうまくつかめず、対人関係がうまく持てない場合に陥る可能性もあると指摘した。本研究結果は、他者との協同作業が必ずしも望ましい経験ばかりではなく、苦痛と感じている者もいることが考えられ、当該学生には、個別支援の必要性が示唆された。

友人関係尺度においては、“傷つけることの回避”において、“協同効用因子” ($\chi^2(2)=7.17, p < .05$) 及び“互惠懸念因子” ($\chi^2(2)=7.30, p < .05$) において有意差が認められ、Ryan法による多重比較の結果、“協同効用因子”に

において全体高群と比して全体低群の方が正の相関が強く、“互恵懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。“傷つけることの回避”は友人を不快にさせないよう気を遣う関わりを示すものと言える。他者に安心できる感覚が比較的低い者は相手に気を遣いながら協同作業を行うことが有効と考えており、他者と協同作業を行うことは必要と考えていることが示唆された。協同作業認識が有効に働くためには、他者への配慮が求められる。ただし、他者への配慮は他者を思いやる“気遣い”なのか、他者に迎合しようとしているのかは、本研究では明らかにできない。

岡田（2007）は、友人を傷つけることを回避する者は他者評価過敏得点が高い傾向にあり、他者の目を気にして内気で過敏な“hypervigilant”タイプに類似していると指摘している。また、岡田（2007）は、友人との内面的なかかわりを避ける者は自己の発達において未熟な特徴を示していると指摘している。加えて、長濱ら（2009）は、協同作業認識において、年齢が高くなるに従い協同効用が重視され、個人志向や互恵懸念が減少する発達過程を見いだしている。上述の指摘を考慮すると、友人を傷つけることを回避する者は、まだ発達の途上にいるのかもしれない。

表2 居場所（安心できる人）群別各尺度の関係（ r ）

ひとり感情・評価	孤独・不安			自立願望			充実・満足			孤絶願望		
	全体低群	全体高群	自分群	全体低群	全体高群	自分群	全体低群	全体高群	自分群	全体低群	全体高群	自分群
居場所(安心できる人)群												
協同効用因子	-.16	.09	-.05	.15	.04	.14	.16	-.08	.27	-.58**	-.34*	-.28
個人志向因子	-.23	.02	-.04	.21	.00	.12	.27	.02	.06	.39**	.38**	.56**
互恵懸念因子	.16	.12	.13	-.01	.05	.18	.08	.01	-.37*	.62**	.35*	.40**
友人関係尺度	自己閉鎖			傷つけられることの回避			傷つけることの回避			快活の関係		
居場所(安心できる人)群												
協同効用因子	-.36*	-.11	-.23	.09	.04	.16	.52**	.03	.30	.40**	.19	.26
個人志向因子	.22	.27	.23	.17	.21	-.06	-.16	.02	-.27	-.21	.07	-.06
互恵懸念因子	.31*	.11	.25	.07	.14	-.28	-.43**	.01	-.46**	-.35*	-.10	-.20

* $p < .05$, ** $p < .01$ 網掛け部分は群間に差を見いだした部分

3.3 おわりに

本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価、友人への認知、協同作業認識の関連を検討することであった。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群、全体高群、全体低群の3群に分け、各尺度得点の相関係数を算出し検討を行った。その結果、安心できる人の評定が全体的に低い者は、協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は、協同作業の必要性を低く感じている傾向にあった。また、相関係数の同等性の検定において、友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられ、“協同効用因子”において全体高群と比して全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く、“互恵懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

今後の展望として、協同作業に肯定的な認識が低く、協同作業の必要性を低く感じている者への個別支援について検討する必要がある。特に近年、アクティブラーニングにおいて、「おとなしい」性格の学生へのかかわりをどのように進めていくのかという話題が注目をされている（亀倉，2016；溝上，2018a，2018b）。溝上（2018a，2018b）は、当該学生が学校から仕事・社会へのトランジションを十分に乗り越えられない可能性が考えられ、それ故、個別対応として学生から目標を挙げてくるのを辛抱強く待つ、授業でときどき声をかけてあげる、学校（大学、学部

学科、高校、中学校)がさまざまなチャンネル(機会)を通して、生徒学生、教員を鼓舞し推進していくガバナンスの機能が力強く求められるとしている。また、亀倉(2016)は、グループワークによる働きにより、「リーダータイプ」を「自燃型人材」、「参謀タイプ」を「他燃型人材」と分類し、特に後者を評価する選択肢を設定する必要性を指摘する一方、グループ討論で黙っていることは意欲に乏しいという評価を受けやすく損をすること、将来リーダーシップをとってグループをまとめる必要性が高まる故、社会に出る前に授業で経験を積む必要性も併せて指摘している。学生が大学における「居場所」を感じるためには、教員側は授業において学生の将来展望を考慮して、学生と向き合っていく体制づくりが必要であろう。

引用文献

- 中央教育審議会(2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申) <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm> (2019年1月8日閲覧)
- 亀倉 正彦(2016). 失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング(アクティブラーニングシリーズ第7巻) 東信堂
- 増淵(海野) 裕子(2013). 大学生における「ひとりの時間」の意義 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, S101.
- 増淵(海野) 裕子(2014). 大学生における「ひとりの時間」の検討および自我同一性との関連 青年心理学研究, 25(2), 105-123.
- 溝上 慎一(2016). (理論) 大学教育におけるアクティブラーニングとは <[http://smizok.net/education/subpages/a00002\(daigaku\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00002(daigaku).html)> (2019年1月8日閲覧)
- 溝上 慎一(2018a). (講話)「あの子はおとなしい性格だから」は無責任! (Part 1) - 何のための学校教育か? <[http://smizok.net/education/subpages/a00025\(otonashii_1\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00025(otonashii_1).html)> (2019年1月8日閲覧)
- 溝上 慎一(2018b). (講話)「あの子はおとなしい性格だから」は無責任! (Part 2) - 実践的ポイント <[http://smizok.net/education/subpages/a00026\(otonashii_2\).html](http://smizok.net/education/subpages/a00026(otonashii_2).html)> (2019年1月8日閲覧)
- 長濱 文与・安永 悟・関田 一彦・甲原 定房(2009). 協同作業認識尺度の開発 教育心理学研究, 57(1), 24-37.
- 岡田 努(1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47(4), 432-439.
- 岡田 努(2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, 15(2), 135-148.
- 岡村 季光(2014). 「居場所」(安心できる人)とひとりで過ごす感情・評価の関係 奈良学園大学研究紀要, 1, 191-197.
- 岡村 季光(2015). 一人ひとりの「居場所」をどうつくるか 梶田叡一(責任編集)・人間教育研究協議会(編) 実践的思考力・課題解決力を鍛える:PISA型学力をどう育てるか(教育フォーラム55) 金子書房, pp.111-121.
- 岡村 季光(2018). 「居場所」(安心できる人)を規定する媒介要因の検討-“自分ひとり”で過ごす居場所に注目して- 奈良学園大学研究紀要, 8, 191-197.
- 岡村 季光・豊田 弘司(2002). 大学生における『居場所』の個人差の検討(2)~自己意識及びエゴグラムとの関係から~ 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 321.
- 岡村 季光・豊田 弘司(2015). 「居場所」(安心できる人)を規定する要因-成人愛着スタイルによる検討- 人間教育学研究, 3, 175-180.
- 岡村 季光・豊田 弘司(2016). 「居場所」(安心できる人)を規定する要因-ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛

着スタイルによる検討－ 奈良教育大学紀要（人文・社会科学），65(1)，27-34.

関田 一彦・安永 悟（2005）. 協同学習の定義と関連用語の整理 協同と教育，1，10-17.

杉本 希映・庄司 一子（2006）. 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究，54，289-299.